

この「車透」鐔の製作時期は？

— 古代から好まれた透文様 —

伊藤三平

この手の透文様を太陽の光と見て「日足透」と称することもあるが、ここでは「車透」として論を進めていく。古い時代の鉄鐔は無銘であり、作者・製作年代は不明だが、この鐔は真っ黒な鉄鐔の輝きは美しいが、余分なものを削いだような印象で、いかにも時代が上がると思われる。

各部位の造込みの特色と法量は以下の通りである。

① 縦81・2mm、横80・9mmの大きさに比して、切羽台が縦長(47・8mm)

で幅が狭い。

② 小柄樋と笄樋の形状が同じ樋孔がある。

③ 耳は角耳で、耳側の厚さは5.3~5.9mmで、

切羽台の厚さは4.5~5.3mmと、中低の造

り込みである。

④ 地鉄は磨地ではなく槌目地で

仕上げている。その為もあり、透かしが正確に同一に

彫られているわけではな

い。

⑤ 黒く輝く黒鐔は実に深み

がある。

⑥ 切羽台の茎孔の縁は叩かれて狭められ、今は素銅を

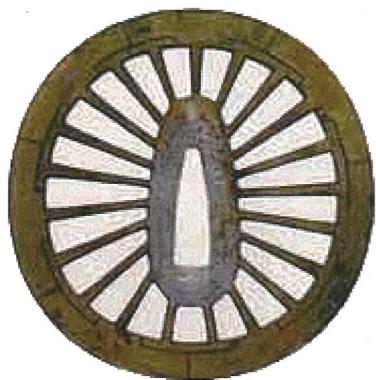
周りに嵌入されたりして、長い期間にいくつかの刀に使用されてきたと思われる。



群馬県邑楽郡多々野村出土品
〔日本刀名品展〕柴田美術刀剣店より



騎馬武者像（京都国立博物館蔵、「e国寶」サイトより）



春日大社蔵の金銅柏文兵庫鎖太刀の鐔
（『武士の意匠 透かし鐔』佐野美術館より）

同じく南北朝時代の作とされる春日大社蔵の金銅柏文兵庫鎖太刀の鐔は忠実に車を写した車透鐔（金銅製）である。

この透文様の原型は、古墳から出土する青銅の倒卵形有窓鐔にも見られる。各古墳からは窓の数や形状に様々なものが出土している。

1. 透鐔の原點と言える伝統的文様

時代は飛ぶが、南北朝時代になると、足利尊氏像とされてきた騎馬武者（現在は高師直やその子などの諸説がある）が、肩に掲げている大太刀の鐔が車透だ。

同じく南北朝時代の作とされる春日大社蔵の金銅柏文兵庫鎖太刀の鐔は忠実に車を写した車透鐔（金銅製）である。

2. 安土桃山時代～江戸時代初期の風俗画に見る市井での流行

安土桃山時代から江戸時代初期（寛永頃まで）の風俗画の中に描かれている人物の差糸には次のように車透籠が描かれている。（各画像は籠文様がわかるように切り抜いている）

この絵は歌舞伎踊りを始めた出雲の阿国の姿である。

当時のスターであり、彼女のファッショナアイテムの刀装は憧れになつたと想定される。

『阿國歌舞伎圖屏風』
(京都国立博物館蔵
「e国寶」サイトより)

こちらの若衆は、刀を支えにして氣取つたボーダーで二人の女性に囲まれている。当時の格好いい「かぶき者」だろう。よく見ると籠の耳に丸味があり、菊花透と称した方が正しい。



『彦根屏風』（彦根城博物館蔵、
「日本美術全集12江戸時代1」より）



左の2図は『北野社頭遊楽図』（『日本美術全集12江戸時代1』より）の中から見つけたものである。二人の籠はよく似た金覆輪の車透のようである。また左図の後ろの月代（さかやき）を剃らずに浴衣のような着物の武士も、絵では目立たないが車透（あるいは菊花透）籠の差糸である。

この時代の風俗画を網羅的に調べたわけではないが、スターの阿国や格好の良い若衆が車透籠を身に付けており、流行したと考えられる。

3. 安土桃山時代～江戸時代初期の大名の差料

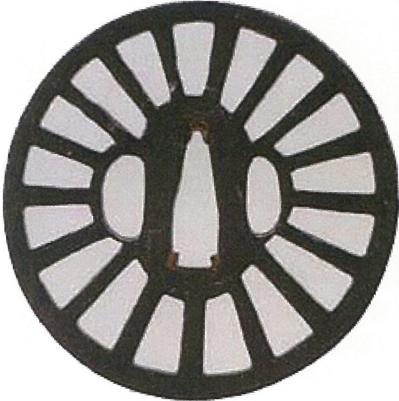
市井の流行に敏感な武士だけでなく、豊臣政権の二大巨頭の前田利家、徳川家康も車透鐔の佩刀も差していたと考えられる。

前田利家のくだけた姿の座像は車透鐔の佩刀を身に付けていた。前田利家は若い時は「かぶき者」であったと伝わるが、この像は晩年だろう。昔の名残で時代の流行に敏感だったのだろうか。



「前田利家座像」(石川県立博物館蔵、
「一春期特別展—
肖像画にみる加賀藩の人々」より)

徳川家康の佩刀として紀州徳川家に伝来した名物。分部志津の拵にも車透鐔が付けられている。家康は流行とは無縁に思えるが、同じ時代に生きた人物である。



分部志津の拵の鐔
(「武士の意匠—透かし鐔
古墳時代から江戸時代まで」
佐野美術館・町田市立博物館より)

4. 安土桃山時代～江戸時代初期の鐔工の作品

活躍年代が安土桃山時代と想定され、在銘品が残っている鐔工の作品にも車透鐔は現存している。埋忠明寿、信家、法安、山吉兵の作品から掲載する。明寿を除く鐔工には車透鐔は複数存在しているのを確認している。



▲埋忠明寿▼
(『日本刀の拵』小笠原信夫著より)



▲信家▼
(『信家鐔』池田末松著より)



▲法安▼
(『透し鐔』小窪健一、
笛野大行、益本千一郎、
柴田光男著より)



八山吉兵（山坂吉兵衛）▽
（『鑑鑑賞事典 上』佐藤寒山監修、

若山泡沫編集代表より）

5. 所蔵品の製作年代の推定

さて、所蔵品の車透鐔は、このような流れの中で、どの時代に推定できるであろうか。

① 『本邦刀劍考』（榎原長俊著、安永8（1779）年自序）の「刀之鐔之事」に

「室町家記に鐔に透する事は古来なし、足利義教將軍の物數奇にて始まる」と記さ

れているが、前述したように古墳時代はともかくとして、南北朝時代（室町時代初期）の画像史料や金銅柏文兵庫鎖太刀に透鐔はあり、もつと遡ると考えられる。

『日本刀大百科事典』（福永醉劍著）でも室町中期を遡る事例（伝承も含めて）を挙げている。

② 南北朝時代の金銅柏文兵庫鎖太刀の鐔は切羽台が細く、尖り気味である。ここには画像を引用していないが室町時代初期とされる上杉家伝來の菊花透鐔（『透し鐔』の冒頭図版として掲載）も同様である。一方、安土桃山時代の鐔工の切羽台は丸味を帯びた橢円形でどっしりしている。所蔵品の鐔の切羽台が細長いのは時代が上がる可能性がある。

③ 安土桃山時代の鐔工の作品には櫃孔が多いが、所載の信家、明寿には片側だけにある。徳川家康佩用の分部志津の鐔は、所蔵品と同様に左右同型の櫃孔がある。

④ 櫃孔について、『貞丈雑記』（伊勢貞丈著、天保4（1843）年刊行）には、打刀では無く腰刀（短刀類）のことだが、「鎌倉將軍の時代には腰刀に笄ばかり挿して、小刀は挿さざりしなるべし」とか「古代目貫と笄とは同様にありしなれど、小刀は別なるべし」。

既に後藤家に祐乘・宗乗・乗真この三代の作に、目貫・笄と二品揃いたるはまま有りしといえり。光乗より以来は、目貫・笄・小刀、三品揃いたる品出来りしと云う説あり。されば、元龜・天正・元和の頃、はや三所物ありしなるべし」とある。実際に後藤家上三代の生ぶの小柄は少ない（笄直しが多い）。

ただし、現存する腰刀（短刀類）の拵には、鎌倉時代から鞘に笄と小柄が装着されていた痕跡があるが、この時代の小柄の方は刃の茎に薄金を巻いた程度の消耗品ではなかつたかと想定されている（『日本の美術332 日本刀の拵』小笠原信夫著）。こう考えると④と整合性は取れる。しかし、腰刀拵ではなく打刀拵に笄・小柄の両方を装着するようになつた時期は不明である。法隆寺西円堂に遺された打刀拵は上手のものは少なく下手のものが多く、その為古く見えるが、意外に両櫃が多い。

⑤ この鐔の鉄色は真っ黒に輝いて美しいが、透の線は細く、槌目仕立てであることも相俟つて寂しく、枯れた印象を持つ。すなわち、この感覚が16世紀に茶人が愛でた「冷・凍・寂・枯」と共通すると考へる。武野紹鴟（1502～1555）の茶会記に記されている道具類の基調が「寂び寂びと冷え切つた黒の世界」で、その「黒のなかの氣韻」を大事にした感覚（『千利休の創意』矢部良明著より）と共に通すると思う。後藤祐乘（1440～1512）が「烏の濡れ羽色」と称された赤銅（色は漆黒）の美を現出した時代の空気と共に通すると思われる。

以上、様々に考察してきたが、現時点ではこの鐔の製作年代は永禄（元龜・天正の頃（1558～1592）と幅広く想定しておきた）。